東那珂遺跡 5

―第 6 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第959集

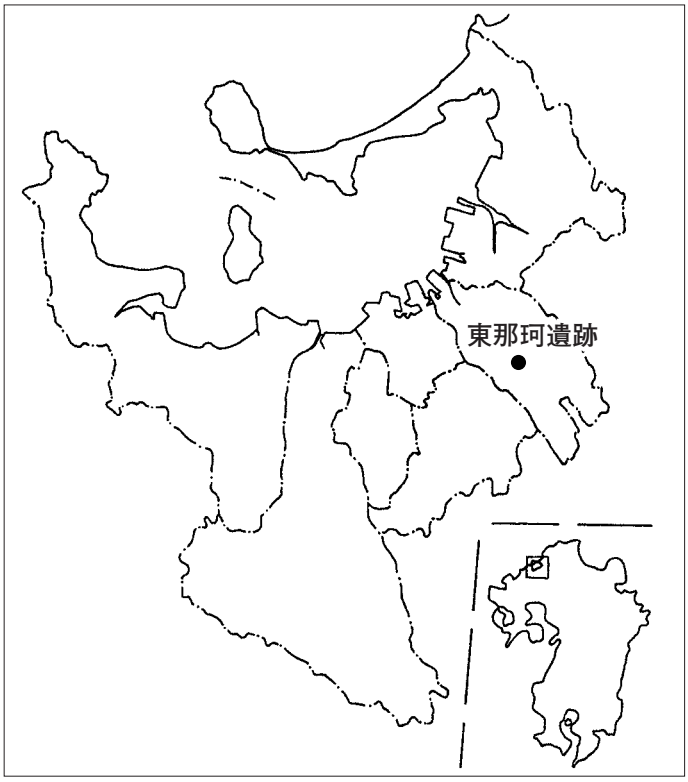
2 0 0 7

福 岡 市 教 育 委 員 会

東那珂遺跡 5

—第 6 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第959集



調査番号　0539
遺跡略号　HGN-6

2 0 0 7

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成17年度に実施した共同住宅建設に伴う東那珂遺跡第６次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木とみ子

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が博多区東那珂１丁目241番地内におけるビル建設に伴い、発掘調査を実施した東那珂遺跡第６次調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、名取さつきが行った。
3．本書に掲載した遺物実測図の作成は星野が行った。
4．本書に掲載した遺構写真の撮影は星野が行った。
5．本書に掲載した挿図の製図は星野が行った。
6．本書で用いた方位は磁北で、真北より６°21′西偏する。
7．遺構の呼称は溝をSD、ピットをSPと略号化した。
8．遺物番号は通し番号とし、遺物番号の後に出土地点を記した。
9．本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10．本書の執筆、編集は星野が行った。

遺跡調査番号	0539		遺 跡 略 号	HGN－6	
地　　番	博多区東那珂１丁目241番		分布地図番号	雀居23	
開 発 面 積	1,192㎡	調査対象面積	452㎡	調 査 面 積	483㎡
調 査 期 間	平成17年８月11日～９月16日				

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 6
　１．調査の概要と層序 …… 6
　２．遺構と遺物 …… 6
　　１）北側水田跡 …… 6
　　２）南側水田跡 …… 9
　　３）出土遺物 …… 12
　３．まとめ …… 12

挿図目次

Fig. 1　東那珂遺跡位置図（1/25,000）…… 3
Fig. 2　東那珂遺跡調査区位置図（1/5,000）…… 4
Fig. 3　東那珂遺跡古地図（1/8,000）…… 4
Fig. 4　第６次調査区位置図（1/500）…… 5
Fig. 5　第６次調査区全体図・土層図（1/150・1/40）……（折り込み）
Fig. 6　出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 9

図版目次

Ph. 1　北側水田面（北から）…… 7
Ph. 2　北側水田面（南から）…… 7
Ph. 3　南側水田面（北から）…… 7
Ph. 4　南側東壁土層（北から）…… 8
Ph. 5　南側（北側）東壁土層（西から）…… 8
Ph. 6　南側（中央）東壁土層（西から）…… 8
Ph. 7　南側（南側）東壁土層（西から）…… 8
Ph. 8　北側東壁土層（西から）…… 8
Ph. 9　畦畔Ａ（西から）…… 10
Ph.10　畦畔Ａ（トレンチ３）（西から）…… 10
Ph.11　畦畔Ｂ（東から）…… 10
Ph.12　畦畔Ｂ（トレンチ４）（西から）…… 10
Ph.13　畦畔Ｂ（トレンチ５）（西から）…… 10
Ph.14　トレンチ６（南から）…… 10
Ph.15　中央部水田面（東から）…… 11
Ph.16　SD04・05・06（北から）…… 11
Ph.17　SD05・06（西から）…… 11
Ph.18　SD09（北東から）…… 11
Ph.19　SD07・09（北西から）…… 11

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

2005年３月８日、野村不動産株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して福岡市博多区東那珂１丁目241番（面積1092.30㎡）における共同住宅建設に関する埋蔵文化財事前審査申請願が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である東那珂遺跡の範囲内に含まれており、周辺で行われた試掘調査の成果より計画された共同住宅建設工事による埋蔵文化財への影響が予想されたため、埋蔵文化財課は2005年４月28日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から約1.9m下で水田面と考えられる堆積層とこれに伴う畦畔などの施設の存在を確認した。試掘調査の成果を受けて、申請者である野村不動産株式会社と土地所有者である三洋電機株式会社の三者で、埋蔵文化財保護に関する協議を行った結果、共同住宅建設に伴う基礎工事によって止むを得ず埋蔵文化財が破壊される564.52㎡については全面に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、調査業務に関する委託契約書の締結後に着手した。東那珂遺跡第６次調査は2005年８月11日から同年９月16日まで行った。

２．調査の組織

調査委託：三洋電機株式会社

（平成17年度発掘調査）

調査総括：埋蔵文化財課長　山口譲治
埋蔵文化財課調査第２係長　池崎譲二

調査庶務：文化財整備課管理係　鈴木由喜

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長　濱石哲也
埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　本田浩二郎

調査担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　星野惠美

調査作業：石橋テル子　近藤澄江　村田敬子　浦伸英　長野嘉一　本郷満子　関哲也　尊田絹代　宗像正勝　宮川ヤエ子　前田勉　中村桂子　徳山孝恵　山崎えい子　遠山勲　原勝輝　黒木三千男　更級成人　片岡博　芹川淳子

（平成18年度整理報告）

調査総括：埋蔵文化財第１課長　山口譲治
埋蔵文化財第１課調査係長　山崎龍雄

調査庶務：文化財管理課管理係　鈴木由喜

事前審査：埋蔵文化財第１課事前審査係長　濱石哲也
埋蔵文化財第１課事前審査係文化財主事　本田浩二郎

調査担当：埋蔵文化財第１課事前審査係文化財主事　星野惠美

整理作業：西島信枝　松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで三洋電機株式会社をはじめとして、多数の関係者の皆様には多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

東那珂遺跡は、福岡平野の中央部、御笠川東岸の沖積地上に位置する。遺跡周辺の地形は、那珂川や御笠川等の大小河川の浸食によって形成された中低位段丘と、沖積低地によって構成され、段丘上に集落跡、墳墓等の遺構が、沖積低地に水田跡等の遺構が発見されている。東那珂遺跡は沖積低地上に立地し、古地図（Fig. 3 ）によれば条里制の痕跡を留めた水田地帯であったことがうかがえる。現在は水田を埋め立てた宅地と化しているが、周辺の試掘からも水田跡や氾濫源が確認されており、広範囲にわたって水田が営まれ、わずかな微高地上に集落の痕跡がみてとれる。今回調査を行った第 6 次調査地点は沖積低地上に立地し、東那珂遺跡の北側中央部に位置する。標高は現地表面で7.0m前後、中世の水田面で5.2m、古代の水田面で4.6mを測る。

周辺の主な遺跡としては、北側に東比恵三丁目遺跡、東側に雀居遺跡・下月隈C遺跡、さらに東側の丘陵上には席田青木遺跡、席田大谷遺跡群や宝満尾遺跡が立地する。また、御笠川を隔てて西側の段丘上に比恵・那珂遺跡群・板付遺跡、その南側の沖積低地上に那珂君休遺跡等が分布する。

また、水田遺跡関連の調査は、東那珂遺跡周辺では、東比恵三丁目遺跡、雀居遺跡、下月隈C遺跡、比恵遺跡群、板付遺跡、那珂君休遺跡などで行なわれている。これらの遺跡では、古くは縄文時代晩期に営まれた水田遺構も確認されている。東比恵三丁目遺跡では弥生時代中期中頃から後期前半にかけて 4 面の水田を検出した。御笠川中流域右岸の自然堤防背面に広がる低湿地上に弥生時代中期中頃に開田され、御笠川の度重なる氾濫によって断絶しながらも後期後半まで使用され続けている。畦畔や水口も検出され、上層・中層ではこれらに区画された水田跡も確認している。雀居遺跡は弥生時代前期から集落が築かれ、中期から後期においては環濠、掘立柱建物が構築されている。古代になると水田が確認され、あわせて水路や畦畔、水口が検出されている。この東側では集落も発見され、木簡・斎串なども出土しており公的施設の存在もうかがえる。下月隈C遺跡では、遺跡の北側で弥生時代後期を中心とした集落跡、南側で古墳時代から14世紀にかけての水田跡を検出した。また、古代における集落からは木簡や陶磁器が出土しており、雀居遺跡と同様の状況を呈する。板付遺跡は諸岡川や御笠川が造る谷底平野の沖積面に囲まれた段丘上の、微高地の上に集落、周辺に水田が営まれている。水田は縄文時代晩期後葉から弥生時代前期初頭にかけてのもので、水路や井堰が敷設されている。那珂君休遺跡は諸岡川と御笠川に挟まれた沖積低地に位置し、古墳時代前期、古代、中世の水田跡が確認され、井堰・水路を検出している。

東比恵遺跡はこれまで 5 次の調査がなされた。第 1 次調査は西側中央部に位置し、古墳時代前期の竪穴住居跡・土坑、奈良時代末から平安時代初頭の道路状遺構・溝・井戸・掘立柱建物・木棺墓を検出した。また、特筆すべき遺物として古墳時代前期の住居跡からは破鏡、古代においては墨書土器、布目瓦、越州窯系陶磁器が出土する。第 2 次調査は中央部南側に位置し、第 1 次調査とほぼ同時期の遺構・遺物が出土する。第 3 次調査は第 2 次調査の北側に位置し、古墳時代前期の溝、中世～近世の井戸、柱穴を検出した。第 4 次調査地点は遺跡の東側に位置し、縄文時代晩期の土坑、弥生時代前期・中期の井戸、溝、土坑を検出した。しかし、後期になると溝が 1 条のみの検出に留まる。また、古墳時代には小土坑や畦畔が検出され、水田化されており、弥生時代中期に集落が終焉した後、開田されたと思われる。第 4 次調査はこれまで行なわれている他の調査と比べると検出された時期・遺構に違いが見られ、異なる遺跡である可能性も考えられている。第 5 次調査は第 1 次調査地点の北側に位置し、古代以前の時期が考えられる水田 2 面とその上面で畦畔と足跡を検出した。また、その上層には古代から中世にかけての包含層があり、緑釉陶器や墨書土器も出土する。

1	**東那珂遺跡**	2	比恵遺跡群	3	那珂遺跡群	4	五十川高木遺跡	5	諸岡Ｂ遺跡
6	那珂君休遺跡	7	板付遺跡	8	高畑遺跡	9	諸岡Ａ遺跡	10	井尻遺跡
11	笹原遺跡	12	三筑遺跡	13	麦野Ａ遺跡	14	井相田Ｃ遺跡	15	井相田Ｄ遺跡群
16	立花寺Ｂ遺跡群	17	下月隈Ｃ遺跡	18	上月隈遺跡群	19	下月隈Ｂ遺跡群	20	天神森遺跡群
21	宝満尾遺跡	22	席田大谷遺跡群	23	久保園遺跡	24	席田青木遺跡	25	上牟田遺跡
26	東比恵三丁目遺跡	27	雀居遺跡						

Fig. 1　東那珂遺跡位置図（1/25,000）

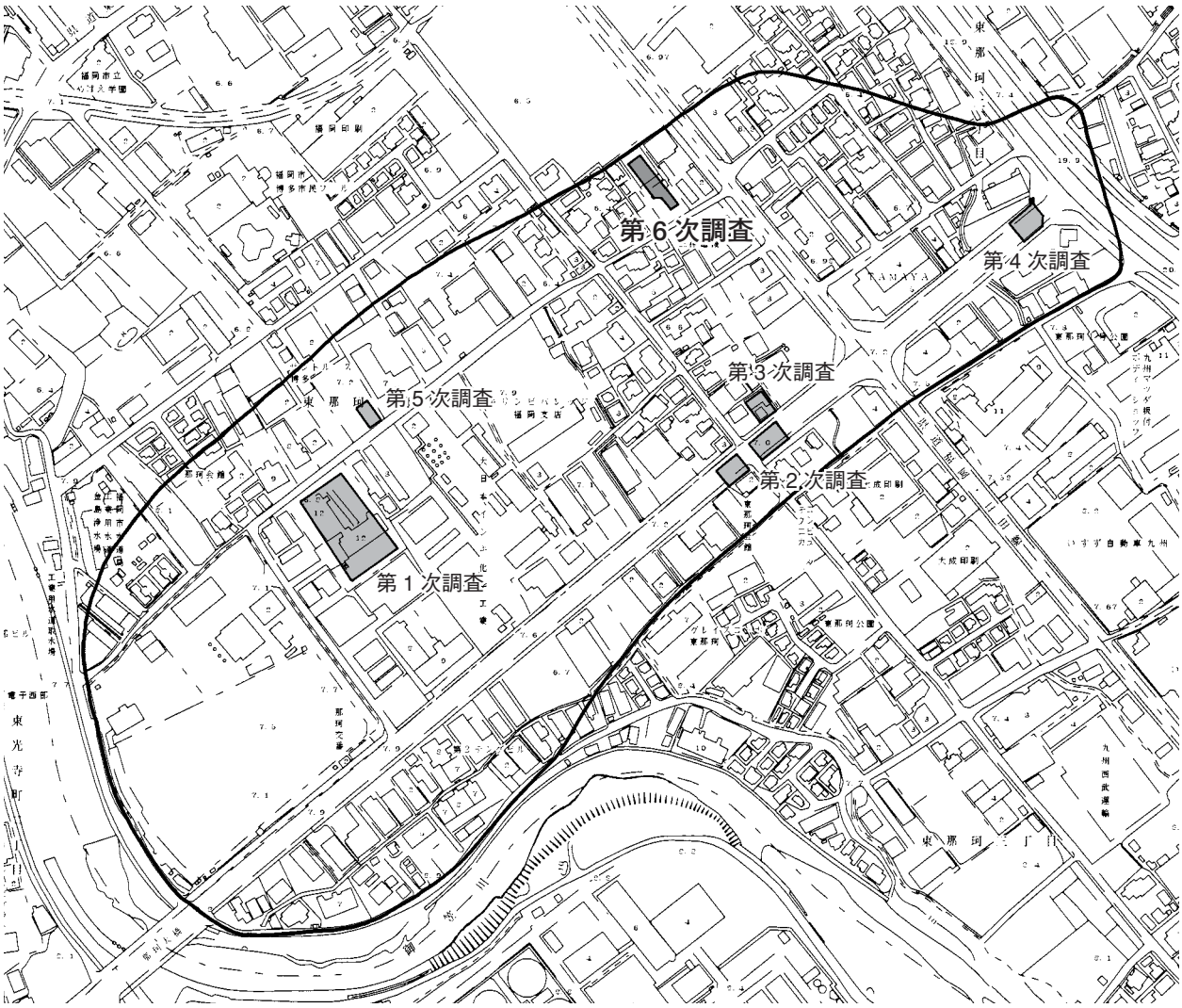


Fig. 2　東那珂遺跡調査区位置図（1/5,000）

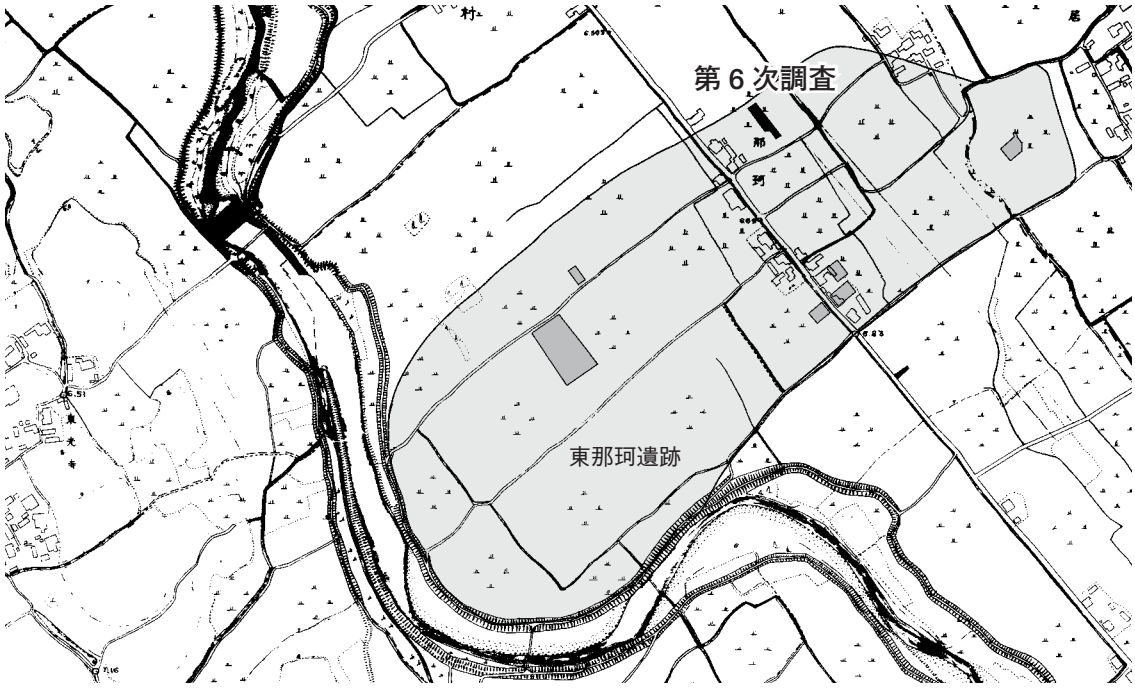


Fig. 3　東那珂遺跡古地図（1/8,000）

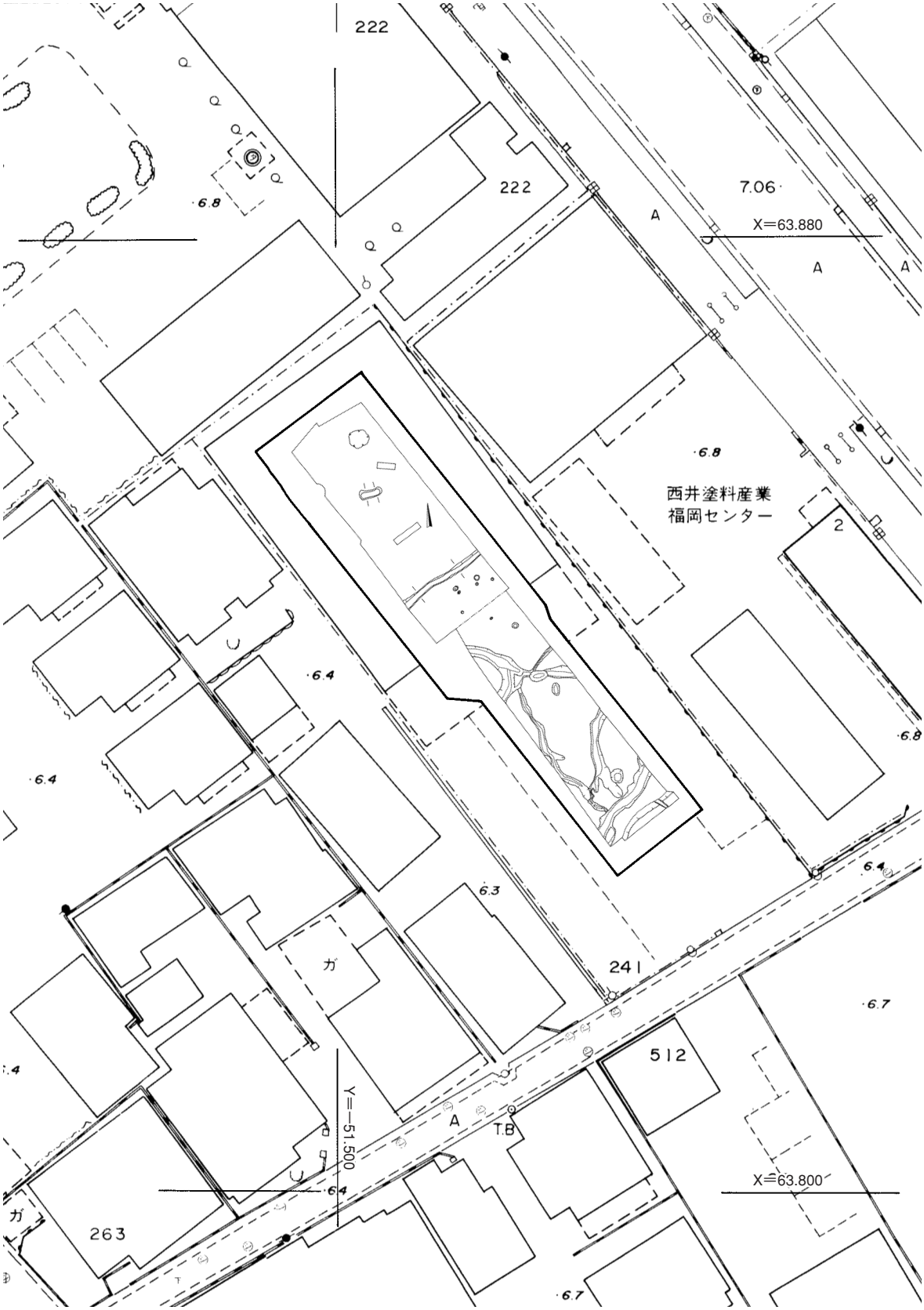


Fig. 4　第 6 次調査区位置図（1/500）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要と層序

本調査地点は東那珂遺跡の北側に位置する。廃土処理の関係上、調査区を２分割し、まず、北側部分の調査を行い、南側部分の調査へと移った。調査は古代以前の水田跡を対象とし、中世以降と考えられる水田面の調査は行わなかった。調査面積は483㎡である。

Fig. 5 に調査区東側の土層を記す。現況では、南側は標高6.5mを測るが、北側は倉庫が建てられていた箇所が約50cm程高くなっており、標高7.0mを測る。敷地全体に厚く盛土がされており、盛土は北側部分で130cm、南側で70cmを測る。旧地表面は標高5.75mで検出され、本来、平坦な地形であった。旧地表面は近年の水田面である灰黒色粘質土、その下には床土と思われる黄色を帯びた青灰色粘質土が堆積する。

近年の水田面から基盤層までは、土層から幾度にもわたって水田が構築され、その水田面を砂、シルトが覆っていることが土層よりうかがえる。また、深さ約20cmにも満たない溝が多く見られ、溝の最下層には砂が堆積することから、常時水が流れていた様相がうかがえる。出土遺物は古代と中世（13世紀前後）の遺物が出土することからこの時期に水田が営まれていたと考えられる。

最上層で確認できる近年の水田（標高5.75m）は５層の灰黒色粘質土の上面である。

次に中世の水田であるが、北側は12・13・22・23・49層（標高5.1m・龍泉窯系青磁碗出土）、大溝Aを挟んで南側は71層（標高4.9m・糸切り土師器坏出土）の上面がこれにあたる。この中世水田と近年の水田の間には他にも数枚水田が確認できるが、洪水等で流されたと思われ、整然と広がっていない。22層から出土した龍泉窯系青磁碗より時期は13世紀前後と思われる。

さらに下層、標高4.6m、17層の上面で古代の水田面を確認した。北側は砂が覆っていたため明瞭に水田面を検出でき、東西方向に走る畦畔２本と多数の足跡を確認した。ここからは須恵器の坏蓋や坏身（遺物番号２・４）が出土する。この水田面は溝Aまでは60・72層と続く（Ph. 5）が、溝Aより南側ではこの水田面は確認できない。中世の水田に削平されたと考えられる。

南側では、さらに25cmほど下げた標高4.35mの62層（灰黒色粘質土）で足跡や流路を検出できた。この面からは遺物が出土しないため時期は不明である。流路は浅く、平面プランも不規則で、自然流路の可能性が大きい。ただし、部分的に足跡が見られることから、水稲を営んだ可能性も捨て切れない。畦畔等の遺構は確認できなかった。この層は北側部分ではトレンチ１・２の６層に相当するものと思われる。トレンチではこの水田面を確認できず、調査を行うことができなかった。

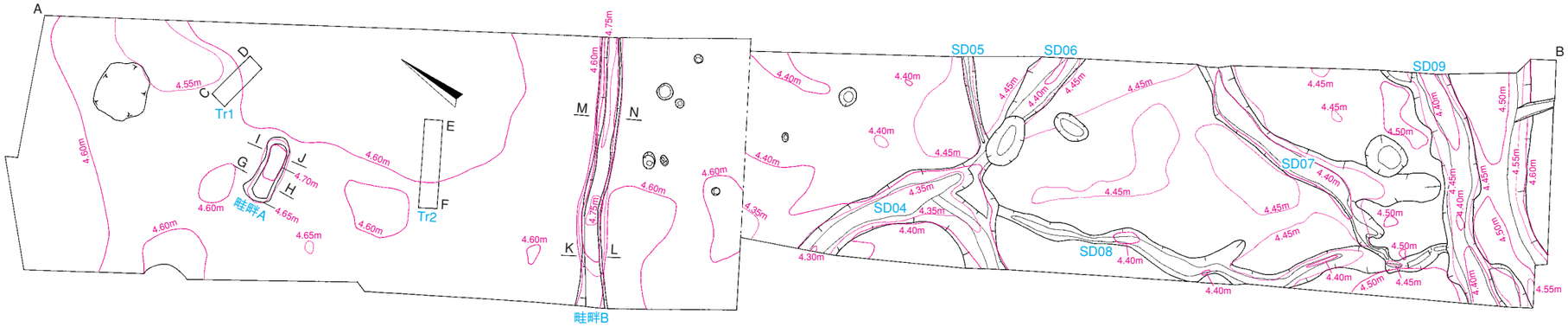
これより下層であるが、南端の2.5m下から青灰色粘質土（321層）を検出した。その下を重機によりトレンチ掘りを行ったが、茶褐色粘質土、約1.0m下から白灰色粘質土が見られ、これが基盤層になると思われる。

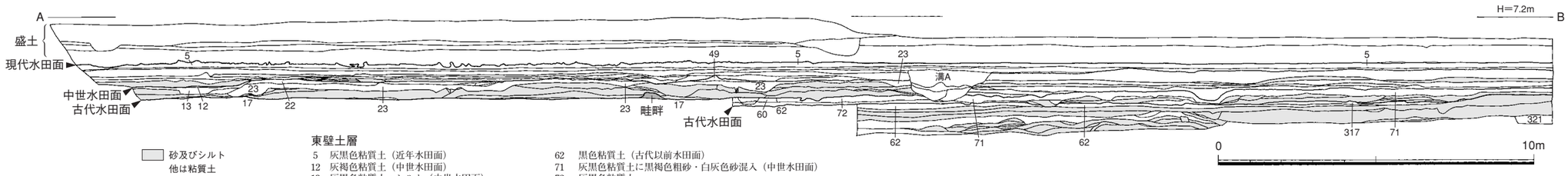
２．遺構と遺物

調査を行った水田面は古代とそれ以前の水田面の２面である。古代の水田面では畦畔２本とピット状遺構、古代以前の水田面では流路とピット状遺構を検出した。流路はいずれも浅く、直線的に走らず蛇行しており、遺物も出土しないことから、自然流路の可能性が大きい。また、ピット状遺構も浅く、土層は自然堆積を呈していたことから人為的に掘削したものではないと考えられる。

１）北側水田跡（Fig. 5　Ph. １・２）

標高4.6m、17層の上面が古代の水田面にあたる。南側部分はわずかに10cmほど高くなり、水田面

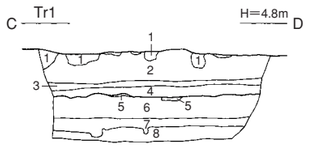


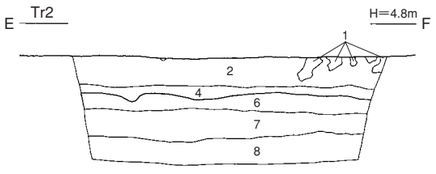


東壁土層

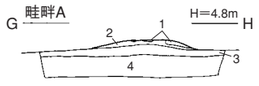
- 砂及びシルト
- 他は粘質土

5　灰黒色粘質土（近年水田面）
12　灰褐色粘質土（中世水田面）
13　灰黒色粘質土・シルト（中世水田面）
17　灰黒色粘質土（古代水田面）
22　灰黒色粘質土（中世水田面）
23　黒色土（やや粘質帯びる）（中世水田面）
49　灰黒色粘質土（中世水田面）
60　黒色粘質土・褐色粗砂・オリーブ灰色土
62　黒色粘質土（古代以前水田面）
71　灰黒色粘質土に黒褐色粗砂・白灰色砂混入（中世水田面）
72　灰黒色粘質土
317　灰色粘質土（褐色粗砂部分的に含む）
321　青灰色粘質土

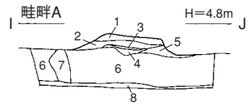




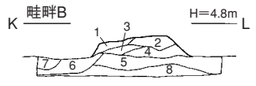
1　白灰色シルト・粗砂（根株・足跡）
2　黒褐色粘質土（北側水田面）
3　黒褐色粘質土・粘土
4　灰黒色砂・粗砂
5　青灰色粗砂
6　灰色粘土にやや黒色帯びる（南側水田面に相当）
7　灰黒色粘土
8　青灰色粗砂・粘土



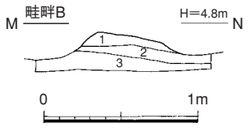
1　白灰色シルト・粗砂
2　灰黒色粘質土・灰橙色シルト（畦畔）
3　黒色粘質土・青灰色シルト
4　黒褐色粘質土（わずかに砂含む）



1　灰色粘質土・シルト
2　白黄色粗砂
3　青灰色シルト
4　白黄色粗砂
5　灰色シルト
（畦畔）
6　黒褐色粘質土
7　青灰色砂・シルト
8　灰黒色砂・粗砂



1　青灰色粘質土
2　灰色砂
3　青灰色粘質土に砂わずかに混入
4　灰色粘質土に砂わずかに混入
（畦畔）
5　灰色土・砂
6　灰色粘土
7　灰白色砂
8　灰黒色粘質土・砂



1　灰色粘土（畦畔）
2　灰黒色粘質土に砂含む
3　灰色土・砂

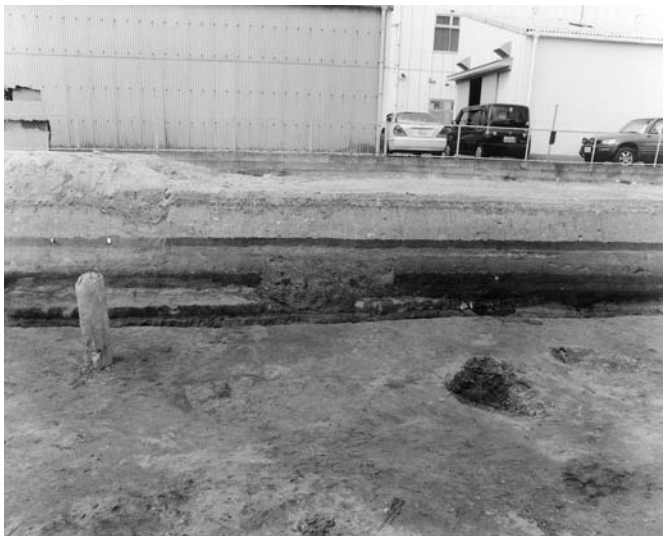
Fig. 5　第 6 次調査区全体図・土層図（1/150・1/40）

Ph. 1　北側水田面（北から）

Ph. 2　北側水田面（南から）

Ph. 3　南側水田面（北から）

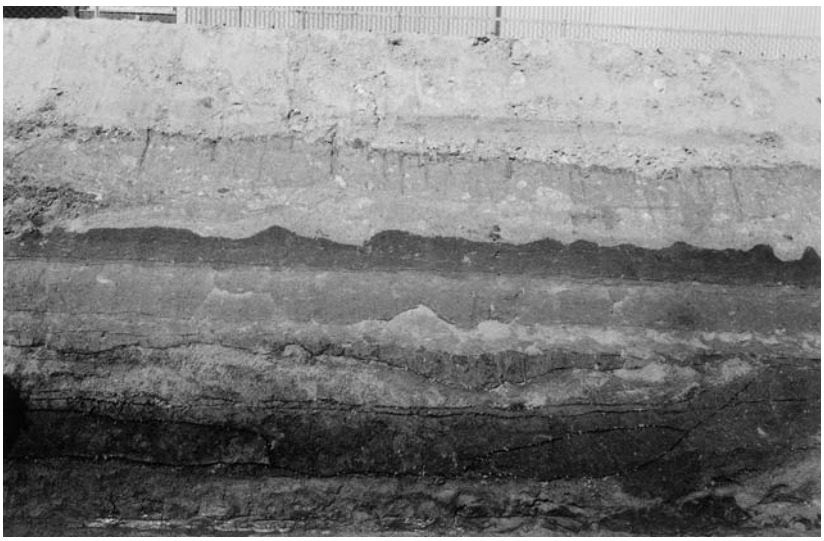
Ph. 4　南側東壁土層（北から）



Ph. 5　南側（北側）東壁土層（西から）

Ph. 6　南側（中央）東壁土層（西から）

Ph. 7　南側（南側）東壁土層（西から）



Ph. 8　北側東壁土層（西から）

は傾斜する。この層は砂に覆われていたため水田面、東西方向に走る畦畔２本と多数の足跡が明瞭に遺存していた。足跡は人間のものと牛のものと思われる蹄の跡、他に株痕も検出したが、それらに規則制は見出せなかった。この水田面は溝Aまでは60・72層と続く（Ph. 5 ）が、足跡等もほとんど見られなくなる。溝Aより南側ではこの水田面は確認できない。中世の水田に削平されている可能性が大きい。この水田面には畦畔Ａ・Ｂが遺存する。須恵器の坏身等から８世紀頃と思われる。

畦畔A（Fig. 5　Ph. 9 ・10）

北側中央部分、標高4.6mで検出した。長さ1.9m、幅0.6～0.8mを測り、方位はN－78°－Eである。高さは５～10cmと低く、大半は削られたものと考えられる。土層からは灰黒色粘質土や灰橙色シルトを用いて構築していることがうかがえる。

畦畔B（Fig. 5　Ph.11～13）

北側中央部分、標高4.6mで検出した。幅0.6～0.9m、長さ7.6mを測るが、西側東側ともに調査区外へ延びる。方位はN－58°－Eである。高さは最も高い部分で15cmを測り、比較的良好な遺存状況である。東側の土層は灰色粘土、西側では灰色粘質土、灰黄色粗砂、青灰色シルト、白黄色粗砂、灰色シルトと細かく構築されている。

２）南側水田跡（Fig. 5　Ph. 3 ～ 7 ）

標高4.35m、62層（灰黒色粘質土）の上面が水田面にあたる。この面からは遺物が出土しないため時期は不明である。北側の水田面と比べると足跡も部分的にしか見られず、流路が走っており、北側

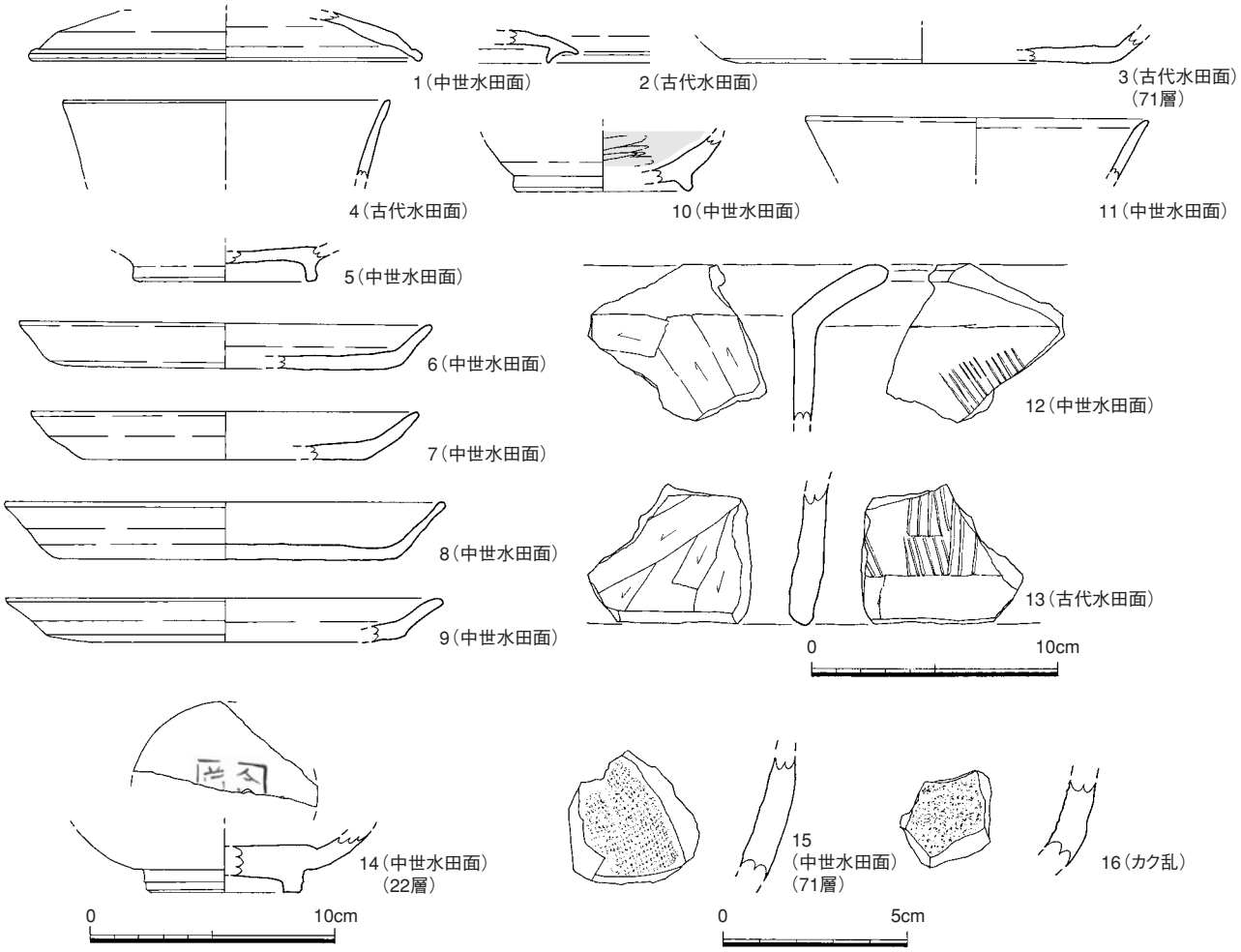


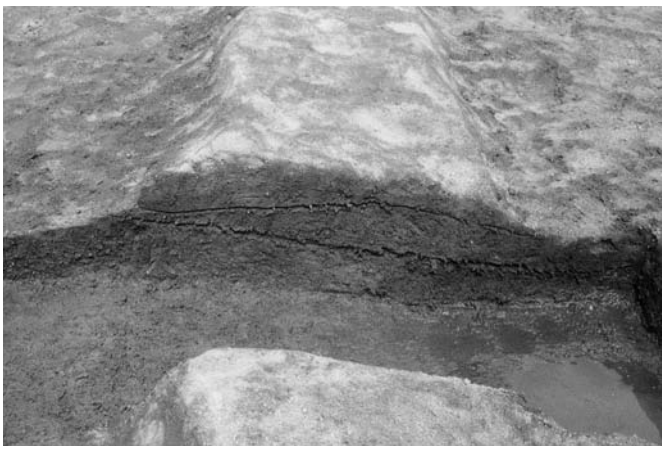
Fig. 6　出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph. 9　畦畔Ａ（西から）

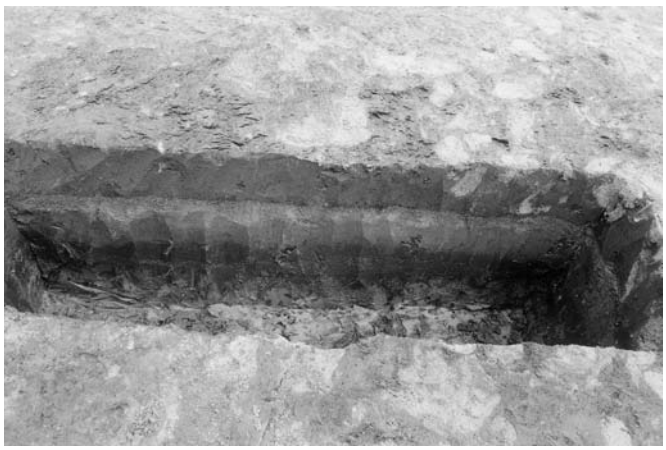
Ph.10　畦畔Ａ（トレンチ３）（西から）

Ph.11　畦畔Ｂ（東から）

Ph.12　畦畔Ｂ（トレンチ４）（西から）



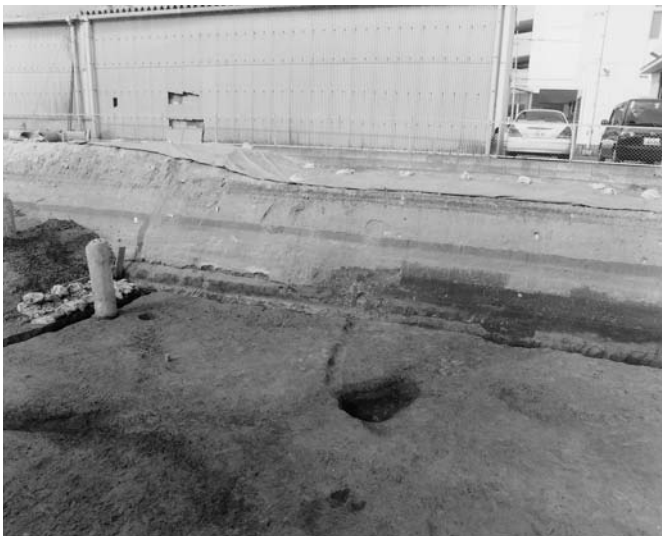
Ph.13　畦畔Ｂ（トレンチ５）（西から）



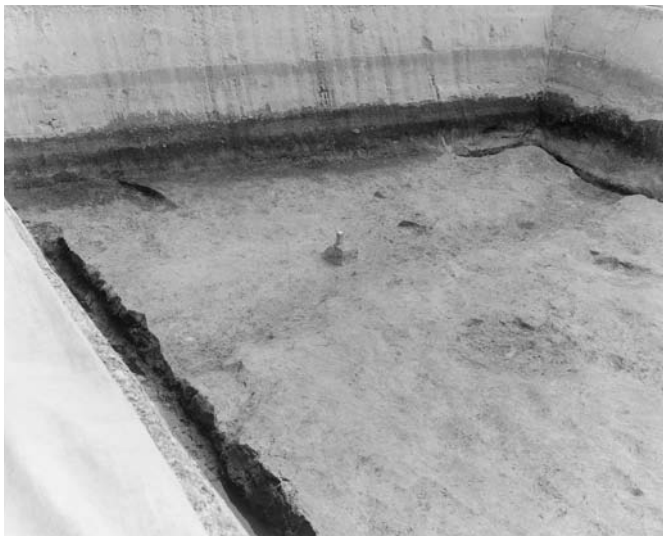
Ph.14　トレンチ６（南から）

Ph.15　中央部水田面（東から）

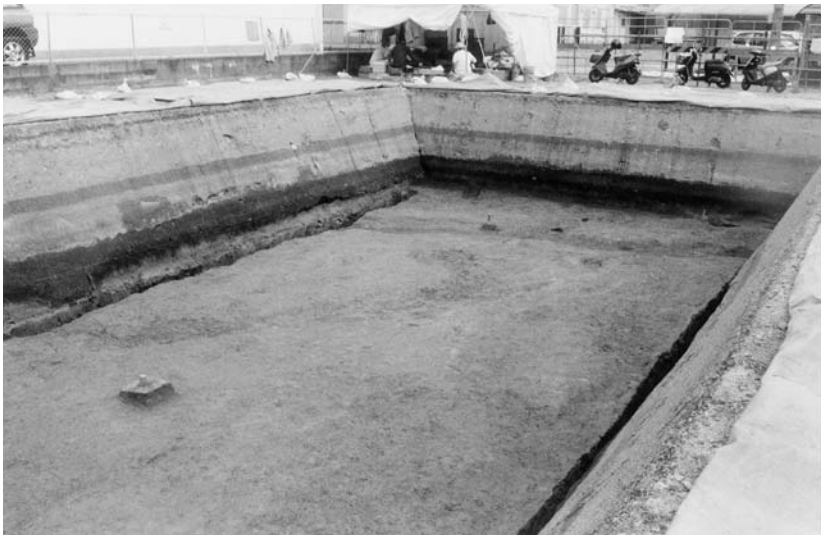
Ph.16　SD04・05・06（北から）



Ph.17　SD05・06（西から）



Ph.18　SD09（北東から）



Ph.19　SD07・09（北西から）

とは全く違った様相を呈する。流路も浅く、平面プランも不規則で、蛇行しており、自然流路の可能性が大きい。ただし、部分的に足跡が見られることから、水稲を営んだ可能性も捨て切れない。しかし、畦畔等の遺構は確認できなかった。この層は北側部分ではトレンチ１・２の６層に相当するものと思われる。トレンチ調査の際、足跡等が確認できず、ともに遺物が出土しなかったため、北側部分は調査を行わなかった。

SD04（Fig. 5　Ph.16）

南側中央部分、西側で検出した。弧を描く溝で、大半は調査区外へと延びる。幅0.9～1.8m、深さは12cmである。覆土は灰色シルトである。

SD05（Fig. 5　Ph.16・17）

南側中央部分、東側で検出した。SD06に接続する溝で、東側は調査区外へと延びる。幅は0.2～0.3m、深さは２～８cmと浅い。覆土は灰色シルトである。

SD06（Fig. 5　Ph.16・17）

南側中央部分、東側で検出した。SD04に接続する溝で、東側は調査区外へと延びる。幅は0.55～1.0m、深さは４～６cmと浅い。覆土は灰色シルトである。

SD07（Fig. 5　Ph.19）

南側部分、東側で検出した。東側は調査区外へと延び、西側は調査区中央付近で立ち上がる。一部、SD08に接する。幅は1.0～1.3m、深さは６cmと浅い。覆土は灰色シルト・粗砂である。

SD08（Fig. 5）

南側部分、西側で検出した。SD04・SD08・SD09と繋がり、細かく蛇行する溝である。幅は0.3～0.6m、深さは２～４cmと浅い。覆土は灰色シルトである。

SD09（Fig. 5　Ph.18・19）

調査区南側、東西方向に走る溝である。東側・西側はともに調査区外へと延びる。幅は0.8～1.2m、深さは７～16cmと他と比べると比較的深い溝である。覆土は灰黒色シルト、灰色粗砂である。

３）出土遺物（Fig. 6）

遺物量は少なく、撹乱や中世以降の水田面からも古代の遺物が出土する。１～４は須恵器である。５～９は土師器で、５は高台付椀、６～９はヘラ切りの底部をもつ坏である。10は黒色土器Ａ類の椀、11は瓦器椀、12は土師器の甕の口縁部片、13は竈の底部片である。14は龍泉窯系青磁碗で、見込みに「金玉満堂」の文字印刻がある。15・16は焼塩壺で、内面には布目が残る。

３．まとめ

今回の調査では、８世紀代の水田面とそれを遡る水田面を検出した。畦畔は２本検出したが、発掘調査区の幅が狭いことからも水田区画を特定するまでには至らなかった。古代の遺物の大半は中世の水田面や撹乱等から出土するが、古代の水田に帰属するものと考えられる。東那珂遺跡では第１・２次調査でこの時期の集落は確認している。また、墨書土器や緑釉陶器、瓦等が出土しており、一般集落とは異なる様相を示す遺物が出土している。これらの集落の周辺に広がる水田跡は、この集落に食糧を供給したと思われる。また、古代の水田面から古墳時代後期の須恵器が出土していることから、古代の水田面の下に広がる水田跡は古墳時代後期に属する可能性がある。今回の調査地点は近世に至るまで、連綿と水田が営まれていることは確認できたが、詳細は不明なままである。古地図からも近年まで条里制を留めた水田区画がなされていたことから広範囲に渡る調査が可能であれば、良好な水田跡を確認できる可能性も大きい。

報告書抄録

ふりがな	ひがしなかいせき　ご
書名	東那珂遺跡５
副書名	第６次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第959集
編著者名	星野　惠美
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
作成機関ＩＤ	40132
所在地	〒810－8621　福岡県福岡市中央区天神１－８－１　TEL 092－711－4667
発行年月日	西暦2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひがしなかいせき 東那珂遺跡	ふくおかけんふくおかしはかたく 福岡県福岡市博多区 ひがしなか 東那珂１丁目241番	40132	0539	33° 34′ 41″	130° 26′ 33″	2005.08.11 ～ 2005.09.16	483㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東那珂遺跡	集落（都市）	古代／中世	水田跡　2 畦畔　2 溝状遺構　6 ピット　11	土師器・須恵器・黒色土器Ａ類・瓦器 龍泉窯系青磁・焼塩壷	

要約	第６次調査地点は沖積低地上に立地し、東那珂遺跡の北側中央部に位置する。今回の調査では、８世紀代の水田面とそれを遡る水田面を検出した。８世紀代の水田では畦畔を検出したが、水田区画等は不明である。下面の水田は古墳時代後期の可能性が考えられる。東那珂遺跡では第１・２次調査でこの時期の集落を確認しており、周辺に広がる水田跡は、この集落に食糧を供給したと思われる。今回の調査地点は近世に至るまで、連綿と水田が営まれていることは確認できたが、詳細は不明なままである。古地図からも近年まで条里制を留めた水田区画がなされていたことから広範囲に渡る調査が可能であれば、良好な水田跡を確認できる可能性も大きい。

東那珂遺跡５

―東那珂遺跡第６次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第959集

2007年（平成19年）３月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社ミドリ印刷
福岡市博多区西月隈１丁目２番11号